

カムチベット語洛玉[Lungyul]方言の方言特徴

鈴木 博 之

1 はじめに

本稿では、中国雲南省迪慶 [bDe-chen] 藏族自治州徳欽 [ʼJol] 県施頂 [Thang-steng] 僳僳族郷洛玉 [Lung-yul] 村で話されるカムチベット語 Lungyul 方言の音体系を紹介する。そののち、提示した音体系に基づいて同方言の音形式とチベット文語形式（以下「藏文」）との対照を行い、Lungyul 方言のチベット語方言内における位置を考察する。

迪慶州内のカムチベット語の下位分類は鈴木 (2018) にまとめられており、Lungyul 方言は香格里拉 [Sems-kyi Nyi-zla] 方言群雲嶺山脈東部下位方言群に分類される。この下位方言群は、その音特徴によってさらに細かく区分される。Lungyul 方言については、現地のチベット人の母語感覚によれば、隣接地域の尼西 [Nyi-shar] 郷、奔子欄 [sPom-rtse-ra] 鎮奪通 [rDo-thang] 村で話される言語に近いという。尼西郷の言語の様子は鈴木 (2017) に、奪通村の言語の様子は鈴木 (2016) に紹介がある。ただし、洛玉村には漢族、リス族など他民族も居住しており、Lungyul 方言は漢語の影響が相対的に大きいという。

本稿で議論する方言資料は、特に断りのない限り、筆者自身の調査によって得たものを用いる。主として議論する Lungyul 方言の調査協力者はヨンシ・ドマ [gYang-skyid sGrol-ma] さん（女性；20 代；吉力貢自然村出身）である。

2 Lungyul 方言の音体系概観

Lungyul 方言の音体系は以下のようなものである。

【音節構造】最大で $^c C_1 GVC$ である。

注：音節末子音が 2 つ存在する場合、最後の 1 つは /ʔ/ である。

【声調】語声調で、ˉ：高平、ˊ：上昇、ˋ：下降、ˊˋ：上昇下降の 4 種。

【母音】各音素に長短の対立が存在する。

i	u	u
e	ə ɐ	o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

【子音】 子音連続に現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前 後	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t̥		k	ʔ
	有声	b	d	d̪		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	t͡s ^h	t͡ɕ ^h		
	無気		ts	t͡s̥	t͡ɕ̥		
	有声		dz	d͡z̪	d͡z̪		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h		
	無気		s	ʃ̥	ɕ̥	x	h
	有声		z	ʒ̪	ʒ̪		ɦ
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ̠	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̠̥		
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音		w				j	

子音連続には主として前鼻音、前気音、わたり音を含むものがある。

3 Lungyul 方言の形式と蔵文との対応関係

蔵文と口語との音対応を探る作業は、口語の発展を分析する重要な手段の1つである。ここでは初頭子音と母音＋末子音の2種に分けて、蔵文と Lungyul 方言との音対応について述べる。声調に関する議論は行わない。なお、チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379-390) を参照。

3.1 初頭子音

3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Lungyul 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で基字に先行する子音がない有声音字 g, j, d, b, dz, zh, z は、基本的にそれぞれの調音点の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈpi: nə 「チベット人」 (*bod mi*) ˈʂoʔ 「下」 (*zhabs*)
ˈku: 「価格」 (*gong*) ˈsɛ: 「ごはん」 (*zan*)

また、語中にある場合、有声音として実現される例もある。

ˈtʂa 「茶」 (ja)

ˈsu: dʒa 「朝食」 (zhogs ja)

また、以上の蔵文有声音字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようである。

ˈca 「鶏」 (bya)

ˈtɕʰ 「6」 (drug)

ただし、例外的に ˈbeʔ 「する」 (byed) がある。

加えて、以上の文字に m, ˈ でない先行子音字（頭字、前接字）が存在するとき、Lungyul 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようである。

ˈfiɡu 「9」 (dgu)

ˈfi dʒa 「100」 (brgya)

ˈfidzwa: 「蚤」 (lji ba)

ˈfi zə mu 「よい」 (bzang mo)

ˈfi do luʔ 「石」 (rdo log)

ˈfi zə 「4」 (bzhi)

3.1.2 蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式

次に、蔵文足字 y, r の対応形式を取り上げる。というのは口語形式として蔵文足字 y, r が基字とともに音変化を起こし、その結果調音点の異なる破擦音や摩擦音が成立させていることが大半で、これらの口語形式と蔵文に基字としてもともと存在する c, ch, j, sh, zh などの口語対応形式とどのように合流しているかが方言差異を分析する手がかりになるからである。

蔵文 Ky 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ˈfi dʒa nɔ 「漢族」 (rgya mi)

ˈhtɕu: 「酸っぱい」 (skyur)

ˈtɕʰaʔ 「あなた」 (khyod)

蔵文 Py 対応形式

基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。

ˈcʰɔ: bə 「裕福な」 (phyug po)

ˈcwa: 「ねずみ」 (hyi ba)

蔵文 Kr 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応するが、そり舌閉鎖音に対応する例もある。

ˈtɕʰaʔ 「血」 (*khrag*)

ˈtɕa dʑa: 「ナイフ」 (*gri chung*)

ˈh̥tɕa 「髪」 (*skra*)

-ʈaʔ / -tɕaʔ (非視覚感知接辞) (*grag*)

ただし、ˈkʰiʔ 「導く」 (*khrid*) や ˈɣu 「歩く」 (*ˈgro*) のように、藏文足字 *r* が脱落したと見られる対応形式をもつ例もある。

藏文 Pr 対応形式

基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。ただし、*sbr* の組み合わせは硬口蓋接近音に対応する。

ˈɕu: mər 「猿」 (*spre ˈu dmar*)

ˈɕo: lu: 「乞食」 (*sprang slong*)

ˈh̥ji: 「蛇」 (*sbrul*)

藏文 c/ch/j 対応形式

基本的にそり舌破擦音に対応する。

ˈtɕʰu 「水」 (*chu*)

ˈtɕa 「茶」 (*ja*)

ˈh̥dʑwa: 「蚤」 (*lji ba*)

ˈh̥tɕu 「10」 (*bcu*)

ˈh̥tɕʰi: m̥ba 「肝臓」 (*mchin pa*)

藏文 sh/zh 対応形式

基本的ににそり舌摩擦音に対応する。

ˈɕʰa 「肉」 (*sha*)

ˈɕʰi: pʰu: 「木」 (*shing phung*)

ˈɕʰwa 「帽子」 (*zhwa*)

ˈh̥zɕ 「4」 (*bzhi*)

まとめ

ここで扱った Lungyul 方言における対応関係を整理すると、以下のようになる。

藏文形式	代表的な対応音	藏文形式	代表的な対応音
c/ch/j	そり舌破擦音	sh/zh	そり舌摩擦音
Ky	前部硬口蓋破擦音	Py	前部硬口蓋摩擦音
Kr		Pr	
		ただし <i>sbr</i>	硬口蓋接近音

その他

以上で触れなかった蔵文足字 r を含む形式に sr-がある。Lungyul 方言の対応形式は、以下のように基本的に足字 r の脱落と分析できる。

ʰsɔ: ʰsɔʔ 「薄い」 (srab srab)

ʰsə teʔ 「硬い」 (sra ?)

3.1.3 蔵文 l/y 対応形式

まず、Lungyul 方言の蔵文 l 対応形式は、蔵文 l, sl, lh、また l を足字とする場合、以下のようになり/ または / となる。

ʼlo: 「道」 (lam)

ʼpa lo: 「牛」 (ba glang)

ʼlwə 「年」 (lo)

ʼʰlɔ ma 「転生ラマ」 (bla ma)

ʼleʔ leʔ 「ゆるい」 (lhod lhod)

ʼʰlɔ: 「風」 (rlung)

ʼɕɔ: lu: 「乞食」 (sprang slong)

ただし、「月」 (zla dkar) は ʼnə ʰgər となる。

次に、Lungyul 方言の蔵文 y (基字) 対応形式は、以下のようになり/ となる。

ʼji kə 「文字」 (yi ge)

ʼji: tsʰu 「故郷」 (yul tsho)

ʼʰjaʔ 「おすヤク」 (g.yag)

3.1.4 蔵文前接字 m/' 対応形式

蔵文前接字 m/' 対応形式は、基字が有声音字の場合鼻音に、無声有気音字の場合前鼻音に対応する。

ʼmu 「虫」 ('bu)

ʼŋu 「歩く」 ('gro)

ʼnɔʔ 「いる」 ('dug)

ʼŋtʰɔ ma 「涙」 (mchi ma)

ʼŋe: mə 「客」 (mgron po)

ʼnʰɔʔ pa 「厚い」 ('thug pa)

ʼnɔʔ 「龍」 ('brug)

ただし、基字が有声音字の場合でも前鼻音に対応するものもある。

ʼŋgwə 「頭」 (mgo)

ʼndzi: kwi: 「指輪」 (mdzub dkris)

3.2 母音および母音+末子音

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、空白の箇所は対応形式が不明であることを意味する。

V\C	# / ʼ	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	ɔʔ	ɛʔ	ɑʔ	ɔ:	ɛ:	ɔ:	ər	i:	ɛ:
i	ə		iʔ	iʔ	u:	e:	i:			i:
u	u	uʔ	uʔ	ɔʔ	u:	i: / e:	ɔ:	u:	i:	i:
e	ə		eʔ	ɑʔ		e:	e:	ər	e:	i:
o	wə / u		iʔ / ɵʔ	oʔ / uʔ	o:	u: / ɵ:	u:	u:		u:

Lungyul 方言では、蔵文との対応関係が一对一になるものが比較的多く、複数に対応関係が認められるものであっても母音の質が互いに近いと認められる例（たとえば、蔵文 -og, -on 対応形式）もあるため、音対応の面では安定していると言える。

Lungyul 方言の際立つ特徴に、蔵文対応形式に鼻音の末子音があっても鼻母音や鼻音末子音が音韻論的に認められないという点をあげることができる。ただし、音声学的な鼻母音は初頭子音が鼻音の場合に後続する母音に現れる。たとえば、次のようである。

^{-fi}no: 「天」 (gnam)

⁻ⁿtʰɔ: 「飲む」 (ʼthung)

^{-h}l̥se: 「尿」 (gcin)

また、r 末子音が存在するのも特徴的である。たとえば、次のようである。

⁻mər 「バター」 (mar)

^{-h}sər 「金」 (gser)

4 Lungyul 方言の方言特徴

3 節において、Lungyul 方言の蔵文から見た諸特徴を簡潔にまとめた。本節ではこれらの特徴について、Lungyul 方言の周辺で話される Sems-kyi-nyila 方言群に属する諸方言の事例と対比することを通じて、その方言特徴を明らかにする。

以下、3 節で扱った特徴のうち、「蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式」(3.1.2 節参照)、および「蔵文前接字 m/ʼ 対応形式」(3.1.4 節参照)、「母音および母音+末子音対応形式」(3.2 節参照)について、それぞれ各方言群との対応関係をまとめていく。

4.1 蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式

Sems-kyi-nyila 方言群に属する方言群のうち、香格里拉市を中心に分布する諸方言については、蔵文足字 y, r を含む例の対応形式について、体系的かつ相互に関連する地理言語学的差異が認められる。鈴木 (2017) の整理する体系的な音対応について、Lungyul 方言の事例を当てはめて考えてみると、rGyalthang (建塘) 方言などと同じく、音対応がもっとも単純な第3類に属する。これには洛玉村より南に分布する Thangteng (施頂) 方言や Byagzhol (霞若) 方言なども属する。一方、洛玉村より北に分布する Nyishar (尼西) 方言や gYaglam (亞浪) 方言などは第2類 B (第3類の音体系に、加えて /çʰ, ç, j/ が存在するタイプ) に属する。

両者とも鈴木(2018)の方言区分の上では雲嶺山脈東部下位方言群に属するが、Lungyul 方言は、後者に類似しているという母語話者の感覚がある一方で、前者と近い特徴を示しているということになる。地理的分布を考えれば、この事実は納得できる状況にある。

さて、ここで注目したいのは、蔵文 *sbr* 対応形式である。Lungyul 方言では、複数の語について蔵文 *sbr* が /j/ と対応することが認められるが、この硬口蓋音の特徴は第2類 B において予測される対応形式 /j/ が関与しているのではないだろうか。第3類に属する諸方言では、蔵文 *sbr* が /z/ と対応し、Lungyul 方言にもこの音素は認められる。このことから、蔵文 *sbr* 対応形式が示すのは Lungyul 方言と第2類 B に属する方言との関連であり、上述の蔵文対応形式については、第2類 B から第3類に変化する途上にあると言えるだろう。

4.2 蔵文前接字 *m'* 対応形式

この特徴を議論するにあたっては、鈴木(2016)で議論した gYaglam 方言の現象が参考になる。Lungyul 方言では、蔵文前接字 *m'* 対応形式について、基字が有声音字の場合鼻音に、無声有気音字の場合前鼻音に対応することを示した。これと並行する現象は、gYaglam 方言に体系的に認められるほか、徳欽県で話されるいくつかの方言にも認められる。Lungyul 方言に見られる現象は、一部例外があるにせよ、体系的な対応関係と認められるため、gYaglam 方言の事例と共通することになる。以上の点から、Lungyul 方言は gYaglam 方言と共通する音変化を経たということができる。

4.3 母音および母音+末子音対応形式

この特徴については、3.2 節で扱ったように、鼻音末子音を伴う例と r 末子音を伴う例の2点について議論する。

先に示したように、Lungyul 方言には鼻母音も鼻音末子音も存在しない。この特徴は、周辺の諸方言には決して見られない、Lungyul 方言に独自の特徴である。この音体系は、むしろリス語に酷似する。しかし、リス語の影響を受けたであろうカムチベット語方言はほかにも維西県などに存在するが、Lungyul 方言と同様の音対応を見せる方言は認められない。ところで、調査協力者が話す漢語について見てみると、若干鼻音末子音があいまいになったり、鼻音要素が脱落する例が認められる。ただし、鼻音末子音自体の発音は存在するため、Lungyul 方言の音体系自体に鼻音末子音または鼻母音を含まないとするのが妥当である。

r 末子音を伴う例については、鈴木(to appear)で議論している現象が参考になる。Lungyul 方言と類似する音対応を示す方言群として、Nyishar 方言や gYaglam 方言など、洛玉村より北に分布するものがある。これらの方言群の中にも、音声実現の面で方言差異があり、地理言語学的に意義ある分布を呈している。Lungyul 方言で r 末子音を伴う例の音声実現について上では触れなかったため、ここで説明をしておきたい。Lungyul 方言では、/ər/ という組み合わせのみが認められ、音声実現は [əɹɪ] のように母音の調音時から舌尖の持ち上がりが認

められる。例によっては、初頭子音の発音時から、すなわち音節全体にそり舌化の特徴が出る。たとえば、/ʈʰnər pa/「耳」(*rna pa*)の第1音節は[ʈʰnərɿ]と発音されることがある。このような特徴を考慮に入れると、Lungyul 方言における r 末子音は、それ自体が [ɿ] という子音としての調音をもつほか、それが音節全体へ影響を与えるという点で、gYaglam 方言など、洛玉村のすぐ北に分布する諸方言と共通する特徴を見せている。これは、地理言語学的観点から考えると、分布としてもっとも期待される状況を呈している。この点で、Lungyul 方言と gYaglam 方言は、地理的にも言語特徴的にも近いといえることができる。

5 まとめ

本稿では、Lungyul 方言の方言特徴を藏文を基準に分析するとともに、その各種特徴について、Lungyul 方言の周辺で話されるカムチベット語諸方言と比べ、異同を考察した。その結果、Lungyul 方言に認められる初頭子音の体系的特徴は、同方言の分布域に南接する地域で話される諸方言と共通性が高いが、鼻音字を前接字とする例及び末子音字 r の対応形式の特徴などは、北接する地域で話される、特に gYaglam 方言と共通する特徴であることが判明した。

参考文献

- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社
- 鈴木博之 (2016)〈香格里拉藏語亞浪話的鼻音系統〉《東方語言學》第 16 輯 114-122
- (2017)「音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際——チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」『言語記述論集』9, 43-64 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000911/>
- (2018)「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 95 号 5-63 電子版：<http://hdl.handle.net/10108/92458>
- (to appear)〈香格里拉藏語的 r 韻尾語音演變：r 韻尾、卷舌化元音、輔音性元音〉

[付記]

筆者による Lungyul 方言及び周辺地域の調査については、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722) および平成 29-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774) の援助を受けている。